佐那河内村の峠道

民俗班（徳島民俗学会）

橘　　禎男[*1]

1．はじめに

県の中東部に位置する佐那河内村は、総面積42.30㎢で、山地面積が全体の70%近くを占めている。

周囲は、北の半分と東を徳島市、南を勝浦町と上勝町、西と北の半分を神山町に接しており、それらの境界線は全て山の尾根上にあって、最高地点は旭ケ丸（1019.5m）である。また、中央部を園瀬川が流れ、その支流や谷が四方に入っている。

交通路は国道438号が園瀬川に沿って西に延び、府能トンネルを経て神山町鬼籠野につながっている。県道は、小松島佐那河内線が高樋から大久保峠を経て徳島市八多町に入り、小松島に通じている。また、寺谷から分かれた県道勝浦佐那河内線が、嵯峨を経て杖立権現越に達している。

今回の調査は、徒歩が主な交通手段であった時代の峠道に焦点を当てて、そのルートと現状、峠道に残る石造物を主とした民俗文化財を明らかにするために行った。現地調査は、主に平成13年10月８日から平成14年１月17日までの間の12日間である。

2．佐那河内村の主な峠（図１）

1）府能峠　290m

「法印のたお」ともいい、府能、仁井田と神山町鬼籠野を結ぶ。峠には、杉の大木と、手洗い石に午頭天王と刻まれている祠がある。

大正12年（1923）に開通した府能トンネルは、本村の交通上重要な役割を果たしてきたが、現在国道の改修工事が進行中で、やがて新府能トンネルが出来ると、県下で四番目の、峠の下に二つのトンネルのある峠となる。

2）黒河峠　280m

仁井田と神山町黒河を結ぶ峠で、「暮がたお」ともいう。10月31日の阿川の二の宮神社の祭りに行く時などに使っていた。石造物はない。

3）弓折峠　260m

北山、井開と神山町一の坂（弓折）、広野を結ぶ。「こうげさん」と呼ばれている山神社（祠）があるので、「こうげさんの峠」ともいう。

4）銚子越　315m

根郷と徳島市一宮町谷又を結ぶ峠で、「谷又越」ともいう。廃道になっているが、昔は嵯峨や根郷から谷又へ嫁いだ人が、里帰りに利用していたという。石造物はない。

5）宇和山越　160m

一ノ瀬と徳島市一宮を結ぶ峠で、昭和８年（1933）まで、一宮局の郵便夫が峠を越えていた郵便路線であった。廃道となり、境界部の道は不明である。

登り口の尾山氏宅より50mほど南の国道脇に、慶応３年（1867）建立の不動明王が祀られているが、これは道路が整備される以前、園瀬川を丸太や板橋で渡っていた旅人の安全を祈願して建立したものという。

6）高樋峠　55m

国道438号が通る。明治23年（1890）に一ノ瀬から府能へ車道が完成するまでは、尾根を越える狭い道であった。同29年（1896）には峠の高さを２間掘り下げた。国道東壁の中央部にお堂があり、仏像が

＊１　徳島市国府町日開42-5

1：府能峠　2：黒河峠　3：弓折峠　4：銚子越　5：宇和山越　6：高樋峠　7：大久保峠　8：尾尻峠　9：地蔵のたお
10：馬越峠　11：野田のたお　12：蝮塚峠　13：杖立権現越　14：関ヶ谷越　15：尾葉古のたお　16：旧大久保峠

図１　佐那河内村の主な峠（基図は「佐那河内村全図」）

線刻された板碑（**図2**）を祀ってある。

図2　高樋峠の板碑

7）大久保峠　75m

寺谷と徳島市八多町大久保を結ぶ峠で、「横坂峠」ともいう。峠には地蔵尊（**図3**）を祀っているお庵があり、50年位前までは寺谷、大久保から参拝者があり、市も立っていたという。

図3　大久保峠の地蔵尊

山際に法師の墓が2基あり、天明4年（1784）建立の「法師大仁」の墓には、「當庵開基也」の銘がある。峠は廃道になっていて人の気配は全くなく、時間が停止したような雰囲気が体験できる。

なお、昭和7年（1932)、旧峠の750m北に現在の県道である車道が開通し、旧峠と同じ「大久保峠」の名が付いた。

8）尾尻峠　130m

尾尻と徳島市八多町犬飼を結ぶ峠で、八坂神社がある。大久保峠とともに、中津峰の観音さんへ参拝する道でもあった。

峠には、でこ人形を持ったまま、この峠で倒れていたという人の墓（**図4**）がある。上下2段に置かれた墓石の上段正面には「還空　浄本」、側面に「宝暦七丁丑年（1757）十二月廿五日」、その反対側には「淡州三原郡市組三条村道薫坊回シ太郎松儀此所而病死仕候　以上」と長い銘文が刻まれている。下段の墓石にも同じく長い銘文が刻まれているが、「還空　浄本」の下に、上段の墓石にはない「信士」の2文字が加えられている。

図4　尾尻峠の人形繰り師の墓

銘文にある「道薫坊」は、淡路の人形遣いの肩書きを表しており、三条村（現三原町）が淡路人形芝居発祥の地であること、そして何よりも人形を持っていたとの伝承を考えると、「太郎松」という人物は、地元で伝えられている「六部さん」ではなく、毎年正月頃村内に来ていた、三番叟などを演じる箱まわしを業とする人であったと考えられる。

『ふるさと佐那河内』(p.148）には、「ろくぶさ

んには大きめの墓を、でこ人形には少し小さい石を建てて、ねんごろに弔いを済ませた」と記されているので、「信士」の２文字が入っている下段の墓石が「道薫坊太郎松」のもので、その上に、今は下に置いてある地蔵尊をのせていたと考えられる。そして、蓮台の付いた上段の墓石がでこ人形の墓で、恐らく太郎松の墓と並んで建ててあったのだろう。

でこ人形にも墓を建て、人形遣いと一緒に鄭重（ていちょう）に祀っていたことは、淡路の人形芝居に対する当時の人々の心情をよく表していて、大変興味深い。調査中、４回ほど現地へ行ったが、いつも花が供えられていた。

なお、峠の南西約800mに、「西山の地蔵さん」がある。地蔵尊の前には、かって嵯峨から尾尻峠へ通じる道があったという。

９）地蔵のたお　160m

丸田（まるた）と高樋を結ぶ峠で、２体の地蔵尊（**図５**）がある。後方の全高113cmの地蔵尊に「嵯峨講中」の銘があるので、峠道は嵯峨の人々も利用していたことがわかる。文政12年（1829）の建立であるが、保存状態はよい。峠にある桑原博氏宅の西側に、旧道の一部が残っている。

図５　地蔵のたおの地蔵尊

10）馬越（うまごえ）峠　150m

嵯峨と根郷を結ぶ峠で、嵯峨から佐那河内街道へ出るルートとしてよく使われた。現在峠は七叉路の車道となっており、大川原高原に向かう車の通行量が多い。石造物はない。

11）野田（のた）のたお　170m

馬越峠から南西500mの位置にあり、上嵯峨から中辺（なかへん）に出るルートであった。側壁のコンクリートに場所をとり、地蔵尊（**図６**）を祀っている。

図６　野田のたおの地蔵尊

12）蝮塚（はめずか）峠　310m

峠の南にある大田原（おおたわら）から平地に出るときに使われた。道路が三叉路になっており、斜面に蛇紋岩（じゃもんがん）の露頭が見られる。石造物はない。

13）杖立権現越　655m

嵯峨と勝浦町坂本を結ぶ峠で、「杖立峠」ともいう。『ふるさと佐那河内』（p.34）によると、阿波の南北をつなぐ道として、２～３世紀頃から開かれていたという。

峠には、茂った自然林の中に権現（ごんげん）社が祀られている。昭和46年（1971）に、嵯峨からこの峠を経て大川原（おおかわら）高原に出る林道が出来た。「四国のみち」が通っており、古いが新しい雰囲気を持つ峠である。

14）関ケ谷越（せきがだに）　840m

奥野と上勝町正木（まさき）を結ぶ峠で、灌頂ケ滝（かんじょうがたき）や慈願寺（じがんじ）に行く道としてよく利用された。六郎山（ろくろやま）の西の窪地を通るので、「六郎越」ともいう。石造物はない。

15）尾葉古（おばこ）のたお　930m

上勝町正木と神山町神領の境にある峠で、上勝町

や本村では「尾葉古のたお」、神山町では「杖立峠」という。府能方面から上勝町傍示(ぼうじ)へ行く道がこの峠を通っていたので、本村の境界上にはないが、本村と関係の深い峠である。

弘化4年（1847）4月23日、本村出身のおもんさんが、嫁ぎ先の傍示の梅ノ木へ帰る途中、この峠近くで遭難したという悲話が伝えられている（『ふるさと佐那河内』p.144～147）。同書及び『上勝町誌』（p.1068～1069）では、おもんさんの墓はこの峠にあるとされ、写真も掲載されているが、どれが彼女の墓なのかはっきりしない。

奥野の安芸守氏（75）によると、35年ほど前、祖父に連れられて現地を見た経験から、「墓は幅約1m、奥行き80cm、高さ24cm位の自然石で、この峠から梅ノ木へ向かう旧道を150m位行った所の道の上のヒメシャラの下にあった」という。前出の文献には、墓を峠まで持ってきたとなっているが、『ふるさと佐那河内』に出ている写真は、幅34cm、奥行き16cm、高さ20cmほどの小さな石である。

峠にある「左藤川　右梅之木」「左上角　右佐那河内」と左右に刻まれた、道標を兼ねた高さ107cmの不動明王（**図7**）は、旅人の安全を守るため、その後に建てられたといわれる。

図7　尾葉古のたおの不動明王

昔は、周辺から大勢峠に集まってきて、太鼓をたたいて踊ったり、市も立ってにぎわっていたという。

3．佐那河内村の峠の特徴

1）周囲を山に囲まれている本村は、村外に出るには必ず峠を通らねばならなかった。そのため峠道が数多く開かれていた。文献に出ているものを含めると、その数は30を超える。村の面積を考慮に入れると、県下で最も峠の多い村といえる。

2）峠数に比べて、石造物がある峠が少ない。地蔵尊のあるのは3峠で、不動尊は1峠、大師像のある峠はなかった。道標を兼ねた地蔵尊は、県下で多く見られるが、道標を兼ねた不動明王は県下の峠では尾葉古のたおだけで、貴重な文化財である。

3）峠名は、地名からとったものが多く、由来がわかりやすい。呼称は、「トウゲ・コエ・ゴエ」などで、「タオ」も多いが、神山町にみられた「ダオ・ドウ」などの呼び方はみられなかった。

4．おわりに

今回の調査では、淡路の人形芝居の研究資料となる石造物を尾尻峠で発見できた。また、尾尻峠や尾葉古のたお、大久保峠などは、交通路の他に信仰や交流の場としての役割も持っていたことがわかった。しかし、おもんさんの墓の特定は出来なかった。

最近、ふるさと体験や癒(いや)しの場所として、峠が見直されるようになってきた。忘れ去られた旧大久保峠も、自然や文化財を生かして、新しくよみがえる時がくることを望みたい

今回の調査に際して、多くのご教示を賜りました、地元佐那河内村の安芸守、吉野清次郎、内藤昭文、高根三郎、青山麻子、桑原博の各氏に深く感謝いたします。

文　献

佐那河内村史編集委員会編（1967）：『佐那河内村史』佐那河内村。

『ふるさと佐那河内』編集委員会編（1992）：『ふるさと佐那河内』佐那河内村。

上勝町誌編纂委員会編（1979）：『上勝町誌』上勝町。

不動佐一・不動敏著（1993）：『淡路人形の由来』淡路人形協会。